

# 関係フレームスキル(RFS)アセスメントシートの開発とその試行について

○岩村 賢 (株式会社スタートライン CBSヒューマンサポート研究所 研究員)  
 刎田 文記 (株式会社スタートライン CBSヒューマンサポート研究所)

## 1 文脈的行動科学と関係フレーム理論

文脈的行動科学(以下「CBS」という。)のアプローチは、個体におけるその時点での文脈に対する標的行動を恣意的に設定し、その予測と制御を目指す立場をとる機能的文脈主義に依拠している。そして昨今、CBSにおける根幹理論としての関係フレーム理論(以下「RFT」という。)が注目されている。

RFTとは、ヘイズが体系化した人間の言語や認知のような高次な行動に対して、予測と制御を目的とした場合に有用な行動原理を体系化した理論であり、シドマンの刺激等価性研究に端を発している。

### (1) 刺激等価性

刺激等価性とは、シドマンが数学における等価関係の概念を借用して、刺激の機能的等価刺激クラスに関して提唱した考え方である。数学における等価の要件である、反射律、対称律、推移律を条件性弁別学習における刺激間の派生的関係の性質として捉えたものがシドマンの刺激の等価性であり、主に象徴的見本合わせ課題の訓練後に新しい見本合わせ課題への転移テストを行う形で研究されている(図1)。

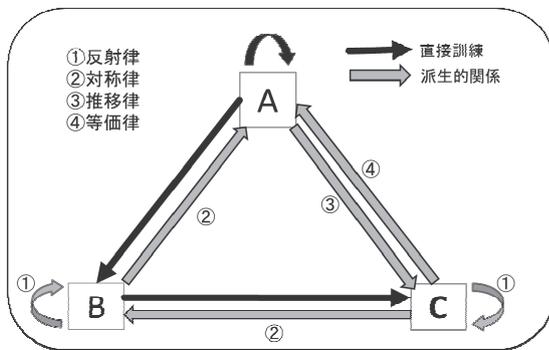


図1 刺激等価性

①反射律とはAはAであり、BはBであることを意味する。これはA→B訓練後にA→AテストやB→Bテストに合格することで評価される。②対象律はAがBであれば、BはAであるということである。これは、A→B訓練後にB→Aテストに合格することで評価される。③推移律はAがBであり、BがCであれば、AはCであることを意味する。これは、A→B訓練とB→C訓練後にA→Cテストに合格することで評価される。④等価律(逆推移律)はAはBであり、BがCであるならCはAであることを意味する。これはA→B訓練とB→C訓練の後に、C→Aテストの合格することで評価される。等価律テストへの合格は刺激等価性における反射律、

対象律、推移律のすべてを満たさなければならないので、刺激等価性の成立を意味している。

### (2) 関係フレーム理論(RFT)

刺激等価性の枠組みにより研究が進んでいく中で等価の関係のみでは説明できないことや等価以外の関係においてもこのような派生的関係が成立しうることが発見されてきた。

RFTでは、等位の関係に限らず、ある機能的な刺激クラスのまとまりを一つの枠組み(フレーム)として捉える。また、言語や認知の中核的な特徴は派生的刺激関係と刺激機能の変換と捉えており、これを関係フレームづけと呼ぶ。

関係フレームづけは相互的内包、複合的内包、刺激機能の変換の3つの特徴によって定義される。関係フレームの関係性には等位、区別、比較、反対、階層、時間、空間、因果、視点などの多様な関係が存在する。

これらのそれぞれの関係性に関して関係フレームづけを行うための能力を関係フレームスキル(以下「RFS」という。)と呼ぶ。RFSの学習は、様々な知的行動についてポジティブな影響が研究されており、学習のための学習とも言われている。

また、ヘイズは、9つの関係フレームファミリー(以下「RFF」という。)について整理している。等位のRFFとはA=Bということの意味する。区別のRFFとは、AはBと異なるということの意味する。比較のRFFとは、AはBよりも大きいなどの大小や高低などの関係を意味する。反対のRFFとはAはBではないということの意味する。階層のRFFは、AはBを含むなどの体系的な関係を意味する。時間のRFFとは、AはBより前であるなどの時間的な前後関係を意味する。空間のRFFとは、AはBの前にあるなどの位置関係を意味する。因果のRFFとは、AであったならBであるなどの原因と結果の関係を意味する。視点取得のRFFとは、「今ーその時」「ここーそこ」「私ーあなた」といった反対のRFFの組み合わせによる関係性を意味する複合的な関係フレームである。

RFSのアセスメントについての研究は、海外ではRaiseYourIQやPEAKなど行われている。

### ア RaiseYourIQ

RaiseYourIQとは、関係フレーム理論に基づいた知的能力や職場、日常の意思決定と問題解決能力の向上を目的として開発されたプログラムである。暗記や数処理など直接的な訓練を行うことなく、知的な能力の向上を目指すことやオンラインで体験することが可能であるなど極めて独

自性が高い。

## イ PEAK、PCA

PEAK Relational Training Systemは、自閉症児の言語および認知障害に対処するための評価手段として開発されたトレーニングパッケージである。PEAKにはD、G、E、Tの4つの包括的なトレーニングモジュールによって構成されている。DとGは、随伴性に基づいた言語は発達の様式に、EとTは、RFTに基づいた言語開発へのアプローチにそれぞれ重きを置いている。

また、PEAKを実施するに際し、4つあるモジュールのそれぞれの段階から実施すべきかアセスメントを行うためのPCAと呼ばれるアセスメントツールも同様に開発されている。PEAKにはRFSの学習に際し、触覚や味覚を利用するなど物品を直接用いるトレーニングも用意されているが、PCAではフリップブックのみで実施できる課題に絞ってRFSをアセスメントできるように開発されている。

## 2 RFSアセスメントシートの開発

RFSを測定するための研究は海外では独自の研究がいくつか行われているが日本におけるツールは開発されていない。そこでRaiseYourIQやPCAなどの評価ツールを参考に、職業リハビリテーション分野でも活用できるRFSアセスメントシートの開発を試みた。

RFSはいくつかに分類されるが本研究で用いたアセスメントシートでは等位、区別、比較、反対、階層、時間、空間、視点取得の8つのRFFに関する設問項目を設けた。

RFSアセスメントシートでは8つのRFSそれぞれに6つの設問を作成した。6つの設問は簡単なものから段階的に難しいものへとなるように構成されている。

## 3 RFSアセスメントシートの試行に関して

### (1) 目的

本研究では開発したRFSアセスメントシートを用いて一般企業で働く成人におけるRFSの一般的傾向を確認することを目的とした。

### (2) 方法

#### ア 手続き

自記式の調査紙として行った。研究実施者が1問ずつ調査紙に記載された問題文を読み上げた後、続けて選択肢をそれぞれ口頭で読み上げ、その後「3つの中から一つ選んでください」と教示するという方式で行った。設問の読み上げを行ってから、次の設問の読み上げを始めるまでの時間間隔を1分として行い、全体としての実施時間は約50分程度であった。その後実施者が回答を読み上げて回答者がそれに従って採点を行い、採点完了後にアセスメントシートと同意書を回収した。

## イ 参加者

本研究では一般企業で働く成人103人を対象とした。対象者に研究内容、目的を説明し、同意を得た。

## 4 RFSアセスメントシートの試行結果

RFSアセスメントシートの全参加者の得点の平均を図2に示した。RFF毎の対象者数、平均、分散、標準偏差を表に示した。

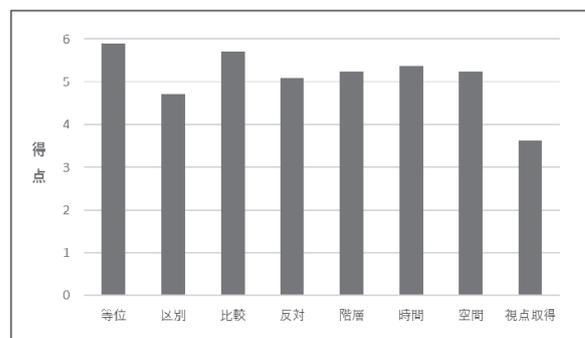


図2 RFSアセスメントシートの全参加者の得点の平均

表 RFF毎の対象者数 (n=103)、平均、標準偏差

	対象者数	平均	標準偏差
等位	103	5.88	0.32
区別	103	4.71	1.01
比較	103	5.70	0.69
反対	103	5.09	1.24
階層	103	5.23	0.64
時間	103	5.38	0.93
空間	103	5.24	0.99
視点取得	103	3.63	0.91

t検定における各RFF間の比較では反対—階層、反対—空間、階層—時間、時間—空間以外ではRFF間に5%水準で有意差が確認された。

## 5 今後の展望

本研究は開発したRFSアセスメントシートを用いて一般企業で働く成人におけるRFSの一般的傾向を確認することを目的とした。サンプル数はやや少ないものの一定の傾向を確認することが出来た。今後は実際に職業リハビリテーションに参加している方々への実施を行い、そのアセスメントに基づいた関係フレームのトレーニングを行うことでより能力を発揮できるようなアプローチを考えていきたい。

また、本研究における結果をもとにRFSアセスメントシートの設問内容を検討した結果、正答率の低い設問の中には複数のRFFが複合している可能性が示唆された。今後は各RFF項目ごとの設問は単独のRFSをアセスメントできるものに修正したうえで複合的なRFSを測定できる設問を開発し、より詳細にRFSをアセスメント可能なものとすることを検討している。